

平成 29 年度 学融合推進センター 学融合レクチャー実施報告書

講義名	ハラスメント概論
申請代表者 (授業実施責任者)	研究科：学融合推進センター
	専攻：
	氏名：菊地浩平
開催日時・場所	2017年7月22日(土) 14:00-16:00 東京工業大学 CIC・多目的室 1
受講者数	国際日本文化専攻： 3名
	構造分子科学専攻： 1名
	その他(本学教職員等) 8名

○ 授業概要

本授業はハラスメント問題の発生を未然に防ぐことを目的とした予防教育の一環として実施する。講義ではハラスメント問題の発生とその要因、および対処法について体系的知識を提供する。これにより、受講者は自身が置かれている状況について客観的に把握する手立てを得ることができると考えられる。

○ 実施報告

❖ 授業開発

- 本授業では東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学生相談・特別支援センター 特任教授の吉武清實氏を講師として招いた。
- また本学の発令教員全員を対象として、授業担当教員¹からの協力依頼ベースで授業開発のためのアンケート調査を実施した。回答数は 29 であった。
- 本学の学生は現在進行形で研究機関に属しながら学生生活を送っていることに加えて、将来的にそういったキャリアパスを選択する者も多く、とりわけアカデミック・ハラスメントと呼ばれる教育研究機関・組織に特徴的なハラスメントについては、何らかの形で関与することになる/すでに関与している可能性がある。そこで現役の教員・研究者が日頃の研究教育活動において感じているハラスメントに対する問題意識を授業に反映させることができれば、よりよい授業を提供できると考えたためである。

❖ 授業実施、および達成することができた教育目的について

- 本授業は次の 3 つの活動で構成された。
 1. **講義**: ハラスメント対策の社会的背景や、大学教員として果たさなければならないマネジメント・ロール(研究・教育環境を適切なものにする義務)などの基本的概念が導入された。また、発生してしまったハラスメント事例への対応・対処についての

¹ 蟻川謙太郎(先導科学研究科), 石川毅彦(物理科学研究科), 伊村智(複合科学研究科), 岩里琢治(生命科学研究科), 菊地浩平(学融合推進センター), 小島道裕(文化科学研究科)

講義が、講師のもとで蓄積された多くの事例から作成された模擬事例を元に行われた。後述する授業評価アンケートの結果からもわかるように、ここでは受講者にとって具体的かつ新しい知識が提供され、受容されたことがわかる。

2. **セルフチェック**: 「ハラスメント防止のためのセルフチェックリスト」に基づき、自分自身の普段の言動が悪意を伴わなくともハラスメントとなりうることを、被害者はもちろんのこと加害者のキャリアにも深刻な影響を与えることが示された。
3. **質疑応答**: 受講者と講師との間で質疑応答が交わされた。多くの受講者がそれぞれの観点から質問を行っており、関心の高さがうかがわれた。

○ 授業評価

授業評価は一般的に学生の成績評価による直接評価と、受講者からの授業内容についての評価である間接評価により行うが、この授業は単位なしの授業であるため、直接評価については行わず、間接評価として実施した授業アンケートから所感を述べる。総回答数は10件であった。

<全体的な所感>

授業の実施については講義形式を選択した。アンケートへの回答にはないが、終了後に参加者からの聞き取りを行ったなかでは、講習会・研修ではなく、講義形式での授業であることがよかったとの回答があった。これは学生が無理なく参加できること、学生であれ教職員であれ知識を学ぶという姿勢で参加できるということ、また臨床心理学の専門家にハラスメントについて学問的観点から講義してもらうことで、ハラスメントという非常にデリケートな問題を客体化して向き合うことができる機会となったためではないかと思われる。受講の義務化・必修化といった議論がある一方、任意の参加である授業であるからこそ、モチベーションが高い参加者が多く集まり学問的観点からハラスメントを考える、という機会が成立したとするならば、こういった機会を設けることには一定の意義があったと思われる。

<個別の回答に基づく分析>

設問1: まず日程についてはほぼ「参加しやすかった」との回答となっており、時期的な設定の問題は特になかったと考えられる。

設問2: 授業参加の動機については複数回答で「今後の自分の学生生活/職務上の役に立つと思ったから」が最も多く9件、「ハラスメント一般についての理解を深めたかったから」が次いで7件、「いつもは学ぶことのできない内容だったから」「ハラスメントについて興味があったから」が3件となっている。当初授業の目的として設定していた予防教育という位置づけについては2件となっている。その他回答として「講師の先生から具体的な話が聞けそうだったから」というものがあり、ハラスメントという対象について実際的な対応を学びたいという意図を持った受講者が多く参加していたことがうかがえる。

設問3: 授業がおもしろかったか、については5段階評価のうち5と4がそれぞれ4件ずつとなっている。その理由についての自由記述、設問の4から8の参加動機との対応、理解の程度確認と合わせて考えるならば、ほぼ受講者が期待していた内容通りの、あるいはそれ以上の内容を提供することができたと考えられる。

改善点については、設問9および10に含まれる内容につきていると思われるが、特に重要と考えられるものについて2点取り上げる。1つめは「参加に指導教員の同意が必要なのは授業の性質上好ましくない」というものである。この指摘は、悩みを持つ受講者がこういった教育課程²の中に位置づけられる学習活動に参加する機会を阻害しかねないことへの危惧だと考えるべきだろう。全体的な所感で述べたとおり、任意参加であるからこそ意味があるという側面がある一方で、予防教育を提供していくことを検討する場合は、学生が意識的に受講する/しないを選択せずに、自動的に同様の情報を受け取ることができる枠組での実施も検討する必要がある。2つめは「グループワークによる作業を通じた情報共有への要望」である。ただしあまりにも生々しい具体的な事例の共有

² ここでの教育課程とは、シラバスとして登録・公開され「研究科・専攻・教育プログラム」等の科目詳細情報を割り当てられた科目群で構成されるカリキュラムを指す。

やそれをもとにしたディスカッションは、全体の議論の方向性や受講者の思考を縛る可能性が極めて高い。また講義において説明があったように、多様なハラスメントに対しては唯一の正解があるわけではなく、その都度関係者間での「調整」活動による解決を目指すことが求められる場合も多い。さらに、仮に参加者の中にハラスメント問題の当事者(特に被害者)がいた場合、この活動そのものがハラスメントとなる恐れもある。したがって、本授業で設定した授業の教育目的の1つ「様々なハラスメントの発生と現れ、対処について体系的に考えることができるようになる」にあって、グループワークは必ずしも有効に作用するとは限らず、受講者の状況に配慮した構成をとる必要があるだろう。

○ その他

設問9および10への回答にあるように、個別選択制の授業ではなく学生がなるべく集まる機会(フレッシュマンコースなど)で実施することで、無理なく情報を提供する機会を作ることができると考えられる。また大学組織として学生/教員/職員をハラスメントから守るための枠組みの整備を求める意見がみられる。このことをどのように本学の教職員として受け取るべきか、広く本授業の情報を共有した上で検討の機会をもうけていただければ、本授業の継続ができないとしても今後の活動に結びつけることができると思われる。

2017年度 学融合レクチャー「ハラスメント概論」授業評価アンケート

1. 授業の日程は参加しやすかったですか	参加しやすかった	7
	参加しにくかったが調整して参加した	2
2. 授業に参加しようと思った動機は何ですか (複数回答可)	ハラスメント一般について理解を深めたかったから	7
	いつもはまなぶことのできない内容だったから	3
	今後の学生生活/職務上の役に立つと思ったから	9
	自分のキャリアパスに役立つと思ったから	1
	ハラスメントについて興味があったから	3
	予防教育ということに興味があったから	2
	その他	1
3. この授業はおもしろかったですか	まったくそう思わない	
	あまりそう思わない	
	どちらとも言えない	2
	ややそう思う	4
	とてもそう思う	4
3-1. その理由について教えてください	事例が豊富でハラスメントと呼ばれる行為や状況の全体像を見渡すことができた。またどのような行為や言動がハラスメントにあたるのか知ることができた。	
	多くの事例を経験されている方にしかできない講義だったと思いました。	
	具体的な事例の話が聞けたので。	
	総研大ではあまり受ける機会のないレクチャーで刺激があった。久しぶりに社会学部時代の学習内容を思い出せて、頭のストレッチもできた気がする。ハラスメントの定義が広く、パワーバランス的なお話になっていたところがとても面白かった。	
	理解はしやすかったが、常識的な内容が多かった。	
	具体的な事例が多かったため	
	具体的な事例に基づいた内容で、ハラスメントに対する意識を一変させた	
4. この授業を聞いてハラスメント一般について理解が深まった	まったくそう思わない	
	あまりそう思わない	
	どちらとも言えない	2
	ややそう思う	5
	とてもそう思う	3
5. この授業を聞いて新しいことを学ぶことができた	まったくそう思わない	
	あまりそう思わない	1
	どちらとも言えない	1
	ややそう思う	4
6. この授業は今後の自分の学生生活/職務上の役に立つと思う	まったくそう思わない	
	あまりそう思わない	
	どちらとも言えない	2
	ややそう思う	6
	とてもそう思う	2
7. この授業を他の学生や知り合いにも勧めたいと思う	まったくそう思わない	
	あまりそう思わない	
	どちらとも言えない	2
	ややそう思う	3
8. この授業の内容を理解できた	まったくそう思わない	
	あまりそう思わない	
	どちらとも言えない	
	ややそう思う	8
	とてもそう思う	2

<p>9. 授業について、こうした方が良いと思うことがあれば教えてください</p>	<p>参加に指導教員の同意が必要なのは授業の性質上好ましくないと思う</p>
	<p>小さな会場でしたが、ときどき話が聞き取りづらかったので、マイクがあると良かったと思います（講師の先生はピンマイクをつけていたように見えたが、マイクの効果を感じませんでした）</p>
	<p>もう少し気軽に参加できると良い。</p>
	<p>もう少し長めに組んだプログラムでも良かったように思う。色々な学校の取り組みなどについても興味がある。日本のハラスメント対策事情の他に、他の国での取り組み例との比較も面白いかもしれないと思った。</p>
	<p>精神論的な内容が多かった。問題を解決するためのプロセスについて、もっと詳しく、また体系的に説明してほしい。</p>
	<p>フレッシュマンコースなど、なるべく学生が集まる機会に設定したほうが良いのでは。</p>
	<p>教員と学生どうして各自の経験談の共有ができれば良かったです。ハラスメントとなるような行為であっても、耐えられる人と耐えられない人の違いは何なのか、全員で考える時間がればより理解が深まったように思えます。</p>
<p>10. 授業についての感想や感じたことなど、なんでも結構ですのでありましたら教えてください</p>	<p>時間が短く消化不良のように思えたがハラスメントに興味関心を持つ入口としては良い時間設定だったと思う。配布資料（特に抜き刷り資料）は保存して今後何かあれば参照したい。</p>
	<p>教員向けにも同様の講義をしていただければ有効なのではないかと感じました。</p>
	<p>会場がアクセスが良く便利でした。参加者がどういう立場の方たちなのかかわからなかったので、簡単な自己紹介やグループワークがあると、お互いの状況や悩みを共有できて参考になったのではないかと思います。</p>
	<p>お話を聞いていたら、程度の違いこそあれハラスメントが起こるのは当然という認識で、迅速な発覚を可能にするしくみや被害を最小限にとどめる対策が大切なかもしれないと思った。</p>
	<p>問題への対処方法について、総研大としての詳しいガイドラインや、組織、マニュアルを整備して、教員や学生が、個人的な努力ではなく、それに則って問題を解決していけるようにすること、またFDやフレッシュマンコースなどの機会を利用して、それについての知識と意識を共有できるようにすることが必要であると強く感じた。今回の授業は、それに向けての試行と考えるべきと思われるが、課題はかなり明らかになったのではないか。葉山本部には、すみやかな取り組みを求めたい。</p>
	<p>当事者と目される学生の参加が多かったのが残念。授業という形ではなく、全学教員がハラスメントに対する意識を持つ研修などが必要ではないか。</p>
	<p>一般的に就任時や入学時にハラスメント講習がありますが、今回受講して分かったようにハラスメントかどうかの線引きがはっきり出来ない以上、グループワークなどの能動的な理解ができるような講習の仕組みが必要と感じました。</p>